



ツバメは、どうして秋になると南へ帰るの

日本の冬より、南の国のほうがすこしやすい

ツバメは、毎年、3～5月ごろ、日本の各地にやってきて、巣を作り、ひなを育てます。ツバメがやってくる季節は、日本では、ちょうど春になって、草や木の芽がいっせいにのびはじめ、それをえさにするこん虫が、たくさん出てきて活動を始める時期です。だんだん気温も上がって、すこしやすくなり、ひなにあたえるえさもたくさんあり、ツバメが子育てをするには、大変つごうがいいわけです。

ちょうど、ひなが自分で飛べるようになる秋、ツバメは、暖かい南の国へ帰っていきます。寒さもきびしくなり、えさのこん虫も、どんどん少なくなっていく日本の冬は、ツバメが生きていくにはむずかしい季節なのです。このように、季節によって、きまった移動をくり返すのを「わたり」といいます。

生きのびるために場所を変える

「わたり」がなぜ行われるかは、まだはっきりわかっていません。しかし、生き物は、自分の子孫をふやしていくのに便利な場所、生きていきやすい場所を探し、うまくその方法を見つけたものだけが、生きのびてきました。あるいは、すでにいる場所にあわせて生きていけるように、自分の生活方法や体のつくりを、変化させてきました。これらに失敗した生き物は、進化のとちゅうでほろびてしまったのです。

ツバメだけではなく、地球上に生きている鳥の5分の1は、毎年、子どもを育てる場所と、冬をすごす場所をかえて「わたり」を行っています。鳥の「わたり」と同じように、クジラなども子育ての季節になると、暖かい子育てがしやすい所へいくために、広い海を移動します。（監修・今泉 忠明）

